

熊本は学生の街ですね、途中で友達に出会ってですね。私は顔をかくして行ってしまいましたよ。恥ずかしい思いもしました。

ハチマキさん

私は馬鹿正直ですからね、一生懸命に働きました。その頃は休みも一ヶ月にべんです。その休みに母が間借りしていた藤崎八幡宮の近くに帰るんです。給料が三円ぐらいの時です。そっくり母に渡していましたよ、余分にもらった小遣いも貯めていて、お袋の好きそうなお菓子とか仏さんの花とか持っていていました。いつもハチマキがけでなにしろ頑張りもんだからハチマキさんと呼ばれていました。むこうハチマキに地下足袋、ハッピ姿ですよ。腰には矢立をさし左手の表裏に字を書いて覚ええました。

炭屋を開店

大正の初め頃、三年間の苦勞の甲斐あって、北千反畑の物産館の前に母と二人でささやかな炭屋を開店しました。弟はまだ学校に通ってました。私の十五・六歳の頃です。

その頃、ご存知ですか、新市街の盛り場、広場や街のつじつじで、マブラーを首にまいた若い演歌師がね、バイオリンを弾いていました。「船頭小唄」「籠の鳥」とかご存知のね、それをよく聞いたものです。粗末な歌詩集を売ってしま

た。

ガリ刷の詩集

そんな頃、熊本ではひゅとりといっていました。が労働者の学友がいましたね、ご存知だと思いますがサンデー毎日で大衆小説「都会の波止場」を書いて当選した。陣内春夫というんですが、当時、熊本では騒がれましたよ。その友人と小さなガリ版刷りの詩集を出したり、日本少年や少年クラブに投稿したりしていました。蘆花先生の「自然と人生」を愛読したり、紀行文のまねをやったりしたのもその頃です。

一家離散

そんな事ばかりしているもんですから商売は閑古鳥です。客が来ても家の炭はパチパチはせて火傷でもされるといけませんからと言って他の店を紹介したりするもんですから、母からよく怒られました。掛取りに行っても、まあこちもそうなんですけど、その日暮らしの家からはなかなか取れませんでね、行きたくないものだから近くの図書館で本を読んだと母が迎えに来るといった具合でね、こういうことだもんだから、商売も二年程つぶれてしまいました。それから一家離散です、母と弟は限府に行きました。

私は一人になり、今度は電信工場の見

でも、この道はどうしても切り開かねばならないということで、決心して「舞姫」をやめ三崎町の路地裏の生活に入り、三畳の部屋に背水の陣をひきました。

近所に住む長崎出身の石松秋二君、この人は「十三夜」「満州娘」などを書いた人ですが、この人と気持ちが合いましたね。お互いに励まし合いながら、一週間十日飯も食えんで水ばかり飲んで飢えしのぎ売れない流行歌をせつせと書いていました。小机ひとつ、綿のはみ出したワラ布団。火がないからマッチ棒で手を温めながら、それもないときは息をはきかけながら、雑記帳に鉛筆でね、血をしばり骨を削る思いで詩を書いていました。当時はレコード会社も数が少くないんです、先に預けた原稿とひき換えに新作を預けるといって、私達は「お百度参り」と言っておりましたが、そんな日が続ききました。無名の新人にとっては狭き門でしたよ。

原稿料は一編一円五十銭、最高三円でした、水道橋の食堂で食べる丼物が五銭程度の時代です。煙草なんか市電の停留所や電話ボックスで拾ってのんでいました。

人生詩人誕生

私の所には酒はおろか、飯も食えない仲間がいつも五・六人集っては大きな事

習いをやりました。採用される時の話ですが、煙突に登るのが試験だと言うんです。工場の煙突でとつても高いんです。それを突べんまで登れと言うんですね。よく見ると鉄梯子も途中で切れているし「こるば登ったら死にばすべし」と言ったら「ぬしゃ、こるば登らんと明日から飯は食われんぞ」と言うんです。小さい頃から明午橋の近くで木登をよくやっていたからかね、自信はありましたが、飯がかかっているもんですから命がけで登りました。

西条八十に師事

この仕事も少年の身体には無理でした。最後に落着いたのが旅館の小番頭です。ささいな給料をさいて「童心詩」というパンフレットを出したり、友人達と「熊本詩人協会」を設立したりしました。十八歳の頃です。

昭和元年、西条八十先生が女学校の講演に来られました。研屋支店に泊まられていた先生にヒザ詰談判したわけですが、こっちは少年ですし「童心詩」のパンフレットぐらい持っていて詩人になりたいたい、お世話を願いたいと切りだしたんですが「とんでもない詩人で飯を食おうなんて」と懇々とたしなめられました。それでも私は「私は文学の志を立てています。後には退かれません。上京した時にはよろしく願います」と言っ

ばかり言っていました。どん底の生活にも堪える若さがあったんですね、決して弱音は吐きませんでしたよ。

栄養失調で腹ぺこ、目はかすんで、ペンを持つ気力もないんですがね、いつも強いことばかり書いては限府の母に手紙を出していました。

忘れもしません、昭和八年六月下旬の朝、二階の三畳で疲れて寝ていた私を階下から呼ぶ声がするんです。降りてみると石松秋二君ら四・五人が飛び込んできて「わりや、当選したぞ」とわめくんです。主婦の友社に私が友人の家気村瀬まゆみの匿名で出した歌詩が一等当選したんです。その通知を松田君達を持ってきたんです。「ほんなこつだろか」と見ていると確かに一等当選になっているんです。私は茫然自失しました。それから仲間達と駿河台にある主婦の友社を訪ね、名乗り出たわけですがね、みすばらしい姿だもんだから社員に筆蹟テストやら匿名応募のことや歌詩を暗記で読み上げさせられたりで大変でした。一等賞金三百円をもらったわけですが、身体がふるえるやら、ペンを落してインクをこぼすやら散々の失態をやらしましたよ。

それからが大変です。皆んなが表で待っているんです。今から乾杯せにゃいかんというわけです。ピヤホールに行つて、そこでカツ丼とか天丼とか食べつけないものを腹一杯食べました。ところが日頃から食うや食わずの者ばかりだもん

たんですが、「うん」とは言ってもらえなかったですよ。この時には上京の決意は逆に火となって燃えていました。年が明けて二月に意を決して上京しました。十九歳です。寒空に粉雪が舞っていました。薄汚れた久留米紺の着物に下駄ばき、小さな行李ひとつ肩にしょってね。女中さんから先生は不在を理由に面会を拒否されましたが、その位のことでは覚悟していましたからね。それでもなんとか話を通しました。

デビュー作品

東京で昼は働き夜は学校に通いましたが、結局、月謝が払えなかったり、時間的に都合がつかなかったりでうまくいきませんでした。この頃、詩人生活の不安もありましたが、故郷にもこの東京にも頼れる人っていないわけですから。意を決して熊本から出てきて以上はなんとしても初心一貫せねばという気持ちはありました。肥後のモッコス気質というんですか。

昭和六年、自分の出したパンフレットに載せた「当世娘気質」という歌謡が認められ、ビクターから出ました。この歌詩がはからずも私のレコードのデビュー作品となったわけですよ。

残飯とドンブリ鉢

作品は出たんですが、そうこうしてい

ですからね、皆んな腹をこわしてしまいましたよ。けれども私にとつては最良の日でした。翌七月号の主婦の友に牧逸馬原作「地上の星座」主題歌「川原鳩なら」の一等当選が報じられ、写真、感想文が載りました。

やっと芽が出たんですね。その後、昭和十二年六月奥多摩の小河内ダム工事に取材した「湖底の故郷」が東海林太郎さんの歌でヒットになり、八月には、当時の暗い世相をキャッチして書いた「裏町人生」がヒットしました。これは私の人生を写した人生哀歌です。後に「波止場気質」「人生航路」など書いたこともあって、人生詩人のニックネームをもらいました。

熊本県政に思う

私は詩人で県政のことは良くわかりませんが、ただ詩人と言えども県政には無関心ではありえないわけです。伝統ある郷土文化の継承ということが言われているようですが、もちろん必要なことだとは思いますが。ただ古き皮袋に新しい酒を入れるというか、郷土文化の見直しということも必要だと考えます。郷土文化の発展と心の豊かさを基調とした暮らしの豊かさというものが実現されることを祈念します。

背水の陣

色んなことがありましたが、私は見切りをつけて逃げるようにして西神田に出ました。その古木屋の店員となった後、近くのカフェの「舞姫」の Cock 見習いとして住み込みました。

翌七年に「港離れて」がニッポーから「水郷の唄」がタイヘイから出てヒットソングとなり、宝塚キネマで映画化されました。この頃から、おれは作詞家としてやっていけるぞという気持ちがあるのかに灯ったような気がしましたが、生活は楽ではありませんでした。道は険しかったです。